奉納
駒ケ岳神社

太々神楽

華麗にして荘厳
優美にして勇壮
神、楽しむかな
祈り願う魂の舞

国選択無形民俗文化財
長野県指定無形民俗文化財

◆五月三日、例祭

上松町観光協会

daidaikagura

太々神楽

だいだいかぐら

解説

湯立神楽（ゆたてかぐら）

湯立神楽は、伊勢流の神楽が諸国に伝播したものと言われていますが、ここ里宮では、神主が垂綏（すいえん）の冠（かんむり）、白狩衣（しらかりぎぬ）白袴（しらばかま）の装束で、鈴・笹（ささ）束を手に釜に湧きたぎる湯の玉を諸々（もろもろ）に振りかける清めの舞と伝えられています。

この太々神楽は、岩戸開舞に始まり六神行事までの十三座を順次奉納していきます。

第一座　岩戸開舞（いわとびらきのまい）

岩戸開舞は、古事記に伝えられる天の岩戸（あめのいわと）を開くという舞ではなく、この太々神楽十三座の、一番最初に舞われるという意味で行われています。

鈴合せ（すずあわせ）、鉾合せ（ほこあわせ）は、両列がいれかわって美しく構成されています。

この型式は、舞の基本であり振鉾舞の一種と云われています。

第二座　御神入舞（ごじんにゅうのまい）

御神入舞は、御神楽の詞にあるように、五穀豊穣・蚕飼安全・天下万民に幸あれと、四方にむかい駒ヶ岳大神を始めとする神々に、祈願する舞と云われ特に足の動きが優美であります。

第三座　病気平癒幸神舞（びょうきへいゆこうじんのまい）

病気平癒幸神舞は、病気平癒の祈願とお礼のための舞といわれています。

古くから駒ヶ岳神社には、病気平癒の願（がん）をかけて神前や社殿の下の土を戴（いただ）いて帰り、病気が治ると戴いた土を倍にしてお返しするという風習（ふうしゅう）も伝えられています。岩戸開舞と同様な舞の構成になっています。

第四座　神代御弓舞（かみよおんゆみのまい）

神代御弓舞は、古い型式を伝える舞の一つと云われています。

弓矢を持って立ち、矢をつがえて天地に擬（ぎ）し、次に座して、弓の絃（つる）を鳴らします。これを四方に行い、悪魔退散・天地の清浄（しょうじょう）を願う舞の一つです。

第五座　陰陽津賀井舞（いんようつがいのまい）

この舞は、陰陽の舞といわれ、鈴と扇を持ち、互いにいれかわるような振りを続けて、これを四方に行います。一説によりますと、この舞は夫婦円満、子孫繁栄の舞とも云われています。

第六座　豊年神子舞（ほうねんみこまい）

豊年神子舞は、烏帽子（えぼし）・狩衣装束（かりぎぬしょうぞく）の四人が、二本の扇を持って舞います。豊年を祈願する舞の一つです。

第七座　四神五返拝（ししごへんばい）

四神五返拝は、天の清浄（しょうじょう）、地の安全、人の和楽（わらく）を祈願して、四神に五返拝する舞と云われています。鼻高面（はなたかめん）をつけ、始めに鉾を持ち、拍子に合わせて、足拍子を踏み、ドドドドっと駈（か）けて次の座に移ります。

そして次は、小剣を抜いて持ち、ケンバイ踏みをして座をかえ、それぞれ四隅（よすみ）の柱に向かい神楽詞（ことば）を唱えます。この舞は鉾舞と剣舞を組み合わせた勇壮な舞です。

第八座　止雨武多井舞（しうぶたいのまい）

止雨武多井舞は、雨を止ませ、晴天を祈願する舞で、烏帽子、狩衣の装束で二本の扇を持って舞います。

第九座　岩戸別神鈿舞（いわとわけのかみうずめのまい）

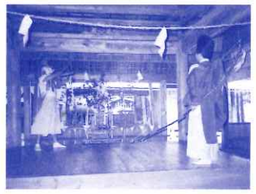
この舞の翁は、天岩戸別神で、鈿女は天鈿神。この神々の問答によって、湯立の神事と、神楽の由来を語ります。

翁は、垂綏の冠・白狩衣・白袴に太刀をはき、御幣を左手でかつぎ、右手に鈴。

鈿女は、柴の狩衣・緋の長袴・柄杓（ひしゃく）と桧扇（ひおうぎ）を持って舞います。この舞は神の問答を主体とした舞であります。

第十座　通常津賀井舞（つうじょうつがいのまい）

この舞は、通常の舞といわれ、烏帽子、狩衣の装束で、鈴と扇で舞います。二人の神楽司が、背中合わせで逆にまわるのが特色です。



第十一座　大宝舞（たいほうのまい）

この舞の大宝の神は、諸々（もろもろ）の神を統（す）べる神で、曽儀（ぞうぎ）は、国津神（くにつかみ）の化現といわれています。

この二神の問答で、神世の国造りや護国の神々の物語を伝えます。出雲神楽の古い形式や問答が伝えられている舞の一つです。

大宝は杵をもち、曽儀は弓をつがえて舞い、問答をします。

第十二座　三剣舞（さんけんのまい）

この舞は、白鉢巻・白衣にたすきがけ、薄緑色の袴をつけた三人の神楽司によって舞われます。始めは、笹束と鈴で舞い、次に太刀を抜いて舞います。剣舞の一つで勇壮な舞いです。終りに『だんばらい』といわれる二刀の剣で舞いおさめます。動きがはげしく男性的な舞いであります。今は行われませんが、長鉾を使った振鉾舞も以前は行われていました。

第十三座　六神行事（ろくじんぎょうじ）

この舞は、烏帽子・狩衣の六人の神楽司によって舞われ六神を拝したあと笹束と鈴をとって舞います。

最後の入れ替り合いのところに変化があり特徴のある舞となっています。

（写真協力・宮戸浩吉氏）

駒ヶ岳神社の創建は、棟札によると天文三年七月（一五三四年）で禰宜（ねぎ）大徳原長大夫春安が、山頂に保食大神と豊受大神を勧請して奥院とし麓の徳原地籍に里宮を建立したのが最初といわれています。

御岳神社と共に山岳信仰として、信濃一円は申すに及ばず、遠く尾張にも講社があり、信者も数多くおります。山の名のように馬の神、また養蚕の神としても有名でした。

この神社に奉納される太々（だいだい）神楽は、氏子中の定められた農家の長男に申し送る古くから一子相伝形式で全部で十三座が祭日に拝殿の舞台で奉納されます。問答で舞うのと奉楽に合わせて舞う二形式があり、三剣の舞・四神五返拝などの舞いは、特に迫力があって素晴らしいと言われています。